

§ 1.5 SCE・Net の事務局を引き継いで

溝口 忠一（幹事）

1. 事務局の引き継ぎ

私が SCE・Net 事務局を齋藤さんから引き継いだのは 2002 年 4 月である。当時、幹事でおられた命尾さんから SCE・Net 事務局をやって欲しいという話があり、それまでは綜研化学(株)さんの中に事務局があって、齋藤さんが精力的に努めておられた。代表幹事の中島さんに指導いただきながら一年間は齋藤さんと一緒に進めた。

まず、自宅に SCE・Net 専用の電話を引き、丁度 ADSL が始まった時期であったので早速加入して PC と共通利用ができるようにした。電話は携帯にも転送が可能なボイスワープ方式にし、モバイル PC を購入して出先でも電話、Eメールの受発信が可能な状態にした。一応、ネットワーク事務局としてのインフラを整備して事務局業務を始めた。

会員への連絡は、全て Eメールと既に構築されていた「SCE・Net ナビ」（ホームページ掲示板）を利用し、資料は電子ファイルにすることにした。まだインターネット、ワードなどの電子ソフトが十分に普及していない時代であったので、会員から利用方法の問い合わせが多くあった。自分でも IT 講習会に出席して知識の取得に努めてみた。

その後、社会は急速に IT 化が進み、Eメールの利用は日常茶飯事になり、SCE・Net 内では、日曜、土曜日に関わらず、朝は 4 時頃から夜は午前 1 時頃まで Eメールによる情報交換が行われるようになってきた。私にとっても、時間に束縛されることがなく何時でも対応が可能で、海外にいても、少しの時間遅れはあるが、事務処理ができる便利な仕組みになった。2 年目からは、学会から事務局経費として交付金ができるようになり、電話代、交通費などに充当できるようになった。

2. 見える組織、技術懇談会、研究会の発足

Eメール、ネットサーバ（ホームページ掲示板）のみのつながりでは、お互いの顔が見えないことから、情報連絡、意思の疎通も十分とはいかない。

事務局を引き受けて、しばらくして個人会員の経験技術、法人会員の製品・技術の発表の場として技術懇談会を隔月に学会会議室で開くことになった。講演会後に、まだ執務時間中である学会事務局に許しを得て、缶ビールと簡単なおつまみで懇親会を開くことにした。参加者の人数とその日の天候を見ながらビールの注文本数を決め、ピーナッツなどのおつまみの調達も事務局の役割であった。

懇親会で語り合う中で、会員活動についての意見交換、新しい活動のヒントなどが得られ、実質的な会員間のつながりができてきた。この技術懇談会は好評で現在まで 60 回近く続いている。その間、田中（光二）さん、石川さん、弓削さん、高砂さんが担当幹事として企画・運営に努めてこられた。事務局にとっては、常に会員のお顔とお名前を一致して認識し、意向をお聞きして運営に反映することは大切な役目と考え、技術懇談会には毎回、出席するように努めている。

発足時の個人会員数は約 70 名である。入会される方、また退会される方があり、会員の顔ぶれは

入れ替わっているが、現在は90名を越えている。

個人会員が技術相談依頼案件に迅速に対応するためと、新しい技術情報の取得と会員の自己研鑽の場として、専門分野別のグループ作りが進められた。環境、安全、エネルギー、装置材料、教育等の研究会がある。多くの研究会は月に1回程度開催されており、研究会参加者は親しくなり、互いの技術経験についての理解が深まってきた。

SCE・Net は、Eメール、ネットサーバーを中心としたグループ（委員会）として発足した学会内では特異な組織であるが、先の技術懇談会、研究会活動によって顔が見える親密な組織へと進展してきた。

3. 活動の展開

技術相談依頼は、年間に10から15件程度で推移している。会員外企業からの相談依頼があったときには、訪問して相談内容を確認すると共に入会を勧めている。4社の入会があった。さらに相談依頼案件を増やすこと、法人会員への情報提供などのサービスを充実していくことが SCE・Net の重要な活動であると考えている。

一方、研究会活動の成果は多くなっている。エネルギー研究会は「図解・新エネルギーのすべて」、「初めて学ぶ・熱・エネルギー」を編集、執筆し出版社からの発行、装置材料研究会は、失敗事例のCD出版を行っている。安全研究会は、AICHEのプロセス安全指標（PSB）の邦訳を行いAICHEから毎月、メールで発信されているが、事務局からはメールマガジンでPSBと会員のコメント（安全談話室）を法人会員に情報サービスの一つとして配信している。

教育研究会発足時に、お茶の水女子大学LWWC増田教授が開催する文科省補助事業「化学・生物総合管理再教育講座」に参加することになり、日置さん、弓削さんにシラバスを作成していただき、36名の会員が講師になって、教材作成、講義を行っている。この講座は4科目、105講義で構成されており、2004年から2008年の4年間にわたり開講された。2009年からは SCE・Net 独自の企画、実施による「社会人向け公開講座」として引き継がれ、山崎（徹）さん、堀中さんが新しいシラバスの作成を担当され、23名の会員がボランティアで参加し、開講している。定員25名を超える応募者があり、学会の一般社会への貢献事業として評価されている。

相談案件への対応、研究会活動の活発化にともない2003年にはSCE・Netの組織、会則などを見直し、事業内容を明確にしていくことが必要になってきた。そこで「改革推進委員会」(委員長弓削さん)が発足し、会則、細則、内規の見直し、インベントリ、カテゴリの作成、ホームページの改訂、パンフレットの作成などを行っている。

この委員会は毎月1回、9回開催された。委員会の結果は、幹事会でも討議され、SCE・Net 活動について共通の認識ができ、全体の運営・管理に大いに役立っている。事務局の処理にも細則、内規で決められた事項が多く、スムーズに処理できる場合が多くある。また、報酬の一部を事務経費として納入する内規が作られており、これによって財政的には余裕を持って運営できるようになってきた。備品としてパソコン、プロジェクトを購入し、研究会、技術懇談会で便利に使われている。

4. 運営、管理と学会との関わり

SCE・Net の運営・管理は幹事会が行っている。ほぼ月に1回開催されている。議題案、幹事会議事録の作成などを事務局が行ってきた。代表幹事は中島さん（2000年4月～2003年3月）から岩村さん（2003年4月～2008年4月）に継がれ、そして現在は山岸さんが就任されている。SCE・Net は、学会の組織では産学官連携センター内の一つの委員会であるので、代表幹事は委員長でもある。

相談案件の対応、外部団体などとの折衝では、事務局のみではなかなか難しい場面が出てくる。まずは代表幹事に連絡し、時には会って相談し、一緒に団体、企業などを訪問したり、適切な指示で処理したりすることが多くある。

学会事務局の SCE・Net 担当部長は、発足時から昨年（2008年）まで山口さんで、現在は宮坂さんである。SCE・Net 事務局としては、随時、活動状況を報告し、学会の意向をお聞きしながら SCE・Net 運営に反映することは重要な役目として努めているが、SCE・Net 活動については自主的に運営することを認めていただきながら、課題がある際には前向きに処理していただいている。

今まで事務局の役割が少しでも果たせているとすれば、歴代の代表幹事と学会担当部長が積極的にサポートしていただいている御陰と考えている。

数年前から SCE・Net 事務局マニュアルをつくり、事務局の仕事を見落としなく、できるだけスムーズに進めるようにしてきたが、新しい対応に追われることが多くある。技術懇談会事務処理は昨年从高砂さんに担当していただき、今年からは堀中さんに会計業務を引き受けていただいている。また幹事会議事録は、持ち回りで記録することになった。

INCHEM TOKYO 2009 での PR に合わせて、新しいカラーの SCE・Net パンフレットを作った。表紙は、若葉からの水滴が水面に小さい輪を広げるデザインになっている。小さい水滴ではあるが、社会に清い輪を広げ、僅かでも貢献できることをシニアの一人として望んでいる。